

昭和五十三年六月十三日 ご講演

「私の人生を語る―今後の日本の大学問題にふれつつ―」

上智大学学長 ヨゼフ・ピタウ先生

私の生まれた島―その地誌・歴史・文化

私は昭和三年一九二八年生まれですが、日本の、学生が千人以上いる大学のうちでは、私のような五十歳以下の学長は、たった一人だけで、大変珍しいことだそうです。しかしこの自慢も、もうすぐ出来なくなってしまう。今年の十月で五十歳になりますから。もともと五十歳と聞いても、みなさんこの頭を見ると、あんまり信じてはくれません。(笑)

私は五十年前に、地中海のまん中のナポリオンが生まれたコルシカ島の南にあるイタリアのサルジニア島に生まれました。四国程度の大さきの島で、人口は僅か百万人ぐらいの島です。二千年前、ローマ時代は三百万人ぐらいの人口で、ローマの食糧基地として有名でした。食糧基地と、もう一つは失敗した政治家が島流しにされた場所でした。さらに山賊も多いということとで有名でした。今でも、割合に有名な山賊がいると聞いています。

この島の背景というと、フェニキア、カルタ

ゴ、ローマ、アラブ、のちにジェノバ、ピサ、そしてスペイン、サボイ家、そしてやつとイタリアと―そのような長い歴史の間、いろいろな文化がいつしよになってぶつかりあったという所です。

しかし反面に、サルジニア島の中央部に行くところ、そこは恐らくヨーロッパのなかで一番古い文化に出会えます。今でもヨーロッパの古い文化に接しようと思うなら、サルジニア島の中央部に行くところ、まだ、例えば家の造り方とか、あるいは社会的な構造とか、たぶんヨーロッパの人類学の勉強のためには恰好の地といえるかも知れません。このような島で私は育ち、高等学校まで生活していました。

戦後イエズス会に入る―

人生の道きまる―そこでの生活・誓願

第二次世界大戦も、そのサルジニア島で経験しました。空襲や爆撃は受けましたが、幸い島で実戦にはあいませんでした。同盟を結んでい

た関係でドイツ人がもちろん来ていましたが、アメリカとある程度の契約があつて、ドイツ人が退いたあとアメリカ、カナダ、フランスの軍隊が進駐してきました。

その時のことですが、私は友達と山登りをしている時、腕を折つたため病院通いをしておりました。ある日のこと待合室で、友達に会つたとき、彼は「高等学校を卒業したら、イエズス会に入る」といいました。「そうですか」とは言つたものの、心の中で、彼はイエズス会に入るものかと思つていたので、思つたとおりの友達はイエズス会に入らないで、私が入つてしまったのです。

偶然のなかの偶然のように聞えるかも知れないのですが、しかしそれによって私の人生の道が決められたのです。何故イエズス会に入会したかと言うと、当時私は十六歳でしたが、その戦争の馬鹿げたことを見て、教育にでも一生をささげてみたいといった、青年の夢、青年の理想もあつたと思います。

イエズス会は、いま修道者が三万人ぐらい、全世界に散らばっている会です。男子だけの会ですが、例えばアメリカだけでも二十八の大学を経営しています。日本と昔から一番親しみのあるフランシスコ・ザビエルは、このイエズス会の創立者の一人です。イグナチウス・ロヨラとフランシスコ・ザビエルらが、このイエズス会を創立したわけです。

入会すると、二年ばかり修練の生活を送りますが、修練は、結局、祈りの生活が中心ですが、しかしそれだけではありません。台所で働く、あるいは二か月ばかり病院に送られて、掃除とか、動けない病人をお風呂に入れるとか、いろいろなことをやらされるわけです。毎朝四時から、だいたい午後の六時まで一日中仕事をやって、それが二か月。そのあと一か月ばかりは外に出て施しのためにいろいろな家をまわって援助をたのむとか、それを突破したものがイエズス会に入れるわけで、ここで誓願をたてます。誓願の一つは従順の誓願です。自分の人生のことは自分だけで決定することではない。目上が決定的な決定することです。もう一つの誓願は清貧です。自分の持ち物は持つてはいけません。必要な物はいただくのですが、しかし自分の金とか、自分の物を自由に買うことはできません。例えば上智大学に教授館があります。そこは日本人と外国人のイエズス会員が住んでい

る所です。小さなビジネス・ホテルと考えていただければよいと思います。洗面所はありますが、トイレやシャワーなど個室にはありません。小遣いは一月五千円ぐらいです。教授館には副院長がいて、小遣い以上に電車賃などが必要な場合には副院長に理由をいつていただくのです。あるいは新しい服が必要な時は、同じように許しを得て購入します。その清貧——なぜそのようなことがあるかという、一つには心の自由を持つためといえるでしょう。もう一つは、独身、貞潔の誓願です。自分の家庭を持たない。性欲を犠牲にする。もつと高い目的のために犠牲にするのです。これを説明するのは大変むずかしいことです。

電車のなかで三人の老人との妻帯談義

この間列車に乗ると、三人のお年寄りの方々がいて、ビールやお酒を飲んでいました。あとで聞くと三人兄弟だったのです。一人は七十二歳、一人は六十五歳、一人は五十八歳です。彼らは私にビールやお酒をすすめながら「いっしょに飲みましょう」と。そのうち「奥さまは日本人ですか」「いやあ実は結婚していません」「そうですか。でもそろそろ結婚しないと、自分の家庭のことも考えたほうがいいでしょう」「まあ、それもそうですね——いろいろなことを話し合ったあと、私は独身であることに

いてこう説明したのです——いま学長の仕事をやろうと思ったら、本当に自分の人生の、毎日の人生の二十四時間は、若い青年のため、そして大学の問題の解決のために捧げるといふくらいの覚悟がなければ、ほんとうの大学づくりはできないのではないかと。その信念があれば、人間の本能的な、一番貴いものを、青年のため、大学のために捧げてもよいのではないかと話したので。家庭を持つことはすばらしいことでしょう。でもこのような信念と高い理想を持つて仕事に当たる人間がいてもよいのではないかと。そうすると、その七十二歳のお年寄りの方は、「ああ判りました」といいました。本当に理解してくれたかどうかは疑問ですが…。

大学の先生になるということ——

先生という言葉——先ず生きて示すこと

——信念をもって述べ伝えること

いま多くの先生方も、私のいうような気持ちになってくれたらいいと思います。大学の先生になると、自分の専門があります。そして場合によっては、学生たちがじゃま者になる。できれば学生に接触しないで、講義だけをやつて、あとは自分の研究室や自分の家とか、どこかで勉強する。たしかに立派な学者であるかもしれない。しかしこれでは立派な教育者とはいえないと思うのです。そこで先生になろうと思

人は、一つのしっかりした信念を持たなければ、先生にならないほうがよいと思います。これは日本の大学の将来とも深いつながりがあるわけです。

結局、先生という言葉は、「先ず生きて」示すということです。先ず生きて、そしてそのためにより立派な人間に成長し、後輩を導くのだという使命を持つことです。先生にしても小学校、中学校、高等学校の時代もあったわけですから、率先して生徒たちに接触して、しかも大学でもその青年たちと接して、学問的な面でも人間としての面でも、人生の面でもいっしょに成長したい——その意味の信念が必要であると思います。

皆さん、いま「先生」という言葉は、私は「先ず生きて」示すと言ったのですが、それは語源的にいい解釈であるかどうか判りませんが、しかしそれは別に、例えば西欧でいわれるプロフェッサー、プロフェッスールという言葉は、みんなの前で一つの信念を持ち、自信を持って述べ伝える、それがプロフェッサーの意味です。今の大学の中でそのような先生が何人いるか。よい学者はたくさんいると思います。しかし本当に大学で働こうと思うならば、自分の人生を、その青年、その若者に捧げるといふ、もう一つの決心も必要であると思います。

私がイエズス会に入った時は、まだ若かった

ので、このようにうまく説明できませんでしたが、しかし心のなかで、戦争で戦うよりも、あるいはただ利益のために働くよりも、できるならば青年といっしょに働きたいという気持ちでイエズス会に入会しました。そして修練が終わったところで、今度はトリノ大学で文学を二年間学びました。

スペインで哲学を学ぶ——外国生活始まる

——外国ではその国の国民の一人となる

ところが、前にも申しあげたように、目上からトリノでの勉強がおわったら君はスペインへ行つて、そこで哲学を勉強しなさいと言われてました。私は高等学校時代、また修練時代もフランスへはたびたび行きましたが、スペインにわたつてからは今日まで、すべて外国での生活です。二十九年前のことです。人生の半分以上は外国で生活してきたわけです。

スペイン語は一月半ぐらいでしゃべれるようになりました。イタリア語とスペイン語は案外似ているのです。しかし外国です。外国に住んでいる以上、その相手国の気持ち、おもしろい国民の気持ちを理解しなければなりません。私にとつて初めての体験であったため苦勞もありました。理由は、そのころのスペインはまだフランコ時代で、割合に閉鎖された社会でした。外の民主主義の思想に抵抗して、結局、

他国から攻撃を受けたわけです。一つの城を造つて、そこから出ない。自分のことだけを大事にして、外の人達のことをあんまり考えなかったのです。

こうした状況の中で、スペイン人と接触を持つということは苦勞でした。しかししばらくして私にとつて大きな喜びとなりました。四、五か月たつと、もうあいつは外国人だとは言われず、みんなといっしょになって生活しました。これは私の今の人生にとつて一番大事な体験だったと思います。結局、外国へ行くならば、まず第一にその国民をよく理解し、そしてできることならば外国人としてではなく、その国民の一人としてあらゆることをいっしょにやつて、一つも特権を要求しないということです。そうしたらみんな自分の仲間として認めるわけです。今でも私はスペインへ行くと、スペイン人として取り扱われます。また中南米へ行くと、そこでも同じように、スペイン語をちよつと話せるわけですから、もうみんなスペイン人か、あるいは中南米のある国の人だと思ひ、そして私もすごく嬉しく感じるわけです。

ついに日本に来る——日本語の勉強

そのための英語も お茶・歌の勉強

このようにスペインのバルセロナ大学での三年ばかりの勉強が終わろうとしたところで、

ローマから、スペインで哲学を終えたら日本に行きなさいという手紙が来ました。皆さんはちよつとびつくりなさるかも知れません。一通の手紙で日本へ行きなさいという。先にも申しましたようにこれは従順のあかしです。こうして私は日本へ来ることになったわけです。なぜ日本へ送られたかという、二人の親しいスペイン人の友達は、すでに日本に行けという命令を受けていました。そして彼らは私を説得して、君も日本に行つたらどうかといいました。そこで一回ローマへ意思表示をしようと、どうぞ私を外国へ、できれば日本へ送つて下さいと、手紙を書きました。しかし六か月たつても返事が来なかつたので、もう私はイタリアに戻るだろう、日本へ行かずに済むのだろうと思つていた矢先に、日本に行くよふにとの命令を受けたのです。最初に日本へと望んだ二人の友だちはその後都合で日本へは来ませんでした。でも日本に送られたということについて私は後悔していません。私の人生のうちで一番大きな恵みと考えています。

中学校と高等学校でドイツ語とフランス語を勉強し、のちにスペイン語を学びましたが、英語は学んでいませんでした。しかし日本に来てから先生が英語で日本語を教えたため、同時に英語も勉強しなければならなかつたのです。英語はちよつとつらかつたのですが、しかしあとで英語の教師にもなり、その後ハーバード大学の大学院に留学したため、どうやら英語も身についたようです。

私が日本に来たばかりのころの日本は、一番つらい時期でした。生存の、生きるための戦いはもう終わつていました。そして復興の時代も終わろうとして、新しい方向を決めるところでした。ちよつとアメリカの占領時代が終わつたすぐあとです。昭和二十七年のことです。

私は日本語だけではなくて、日本の国について勉強しなければならなかつた。例えば、お茶のこと。最初から毎週二時間ぐらのお茶の勉強をしました。勉強よりも経験ですね。床上に二時間も二時間も座つて、もう大変でした。しかしその日本語学校の二年間はその意味で大きな訓練でした。

その中の一番よい訓練は、散歩の時に、できるだけ多くの日本人と知り合つて、日本語の練習をしたことです。君たちも恐らく外国人に会うと、すぐ英語で話してみたいと思つてしよう。私も同じような気持ちで、よく日本語の練習を

したのですが、その中から幾人か、今でも本当に親しくしている友人がいます。

栄光学園の先生になる――

そこでの体験・教訓

ところで日本語学校が終わつたあと二年ばかり、私は栄光学園という――今神奈川県で有名校になつてゐるようですが――中学校と高等学校――現在大船にあります――その当時は横須賀の田浦にありました――で英語と社会科を教えなければならなかつたのです。英語は独学でしょう。中一と中二の生徒たちに英語を教える。最初は、とんでもない、これは絶対に出来ないと思ひ、その時の校長先生、『日本の父へ』という本を書いたグスタフ・フォス先生にこのことをいうと、「いや、男に出来ないことはいはずだ。やろうと思えば、やるんだ」と言うんです。しようがないから、英語を教えることになつて、毎晩、一課ぐらい生徒たちよりも進んでうんと勉強して、準備したわけです。今でもその時の教え子達と親しく文通しあつています。

ここで、その時の一つの事件で、私が今でも思い出す話をしましょう。それはある日私が校庭を歩いていると、校長先生が窓から見ていて、私を呼んだんです。「ピタウ。君はどうして向こうの紙くずを拾わなかつたのか」「すみませ

ん。見ませんでした」「いや、見なかったということでは、いいわけにはならない。見るはずだった」「本当に済みません」と頭をさげました。そしてその時に校長先生はこういわれたのです。「あなたが学校を歩き回るときは、この学校の責任は、すべてあなたの肩にかかっているということを決して忘れてはいけません」と。

大学—ウニベルシタス—

教授と学生の共同体—

今の大学にこの共同体意識があるだろうか

一つの紙くずを拾う——何か、ちっぽけなことのようにですが、それによって学校全体の雰囲気が変わって来る。拾うか拾わないかということによって変わって来る。いい学校、あるいはいい大学とはどういう点かというところ、場合によっては、このようなちっぽけな事から現われるのです。そして学長であろうが他の先生であろうが、あるいは、学生であろうが、この大学は自分の家だ、小さなことでも自分でやらねばならない。この気持ちがないと大学は良くなりません。今日の日本の大学で欠けている所があるならば、このような心がけだと思えます。結局、大学という所は、自分のうち、あるいは家庭と思わなければ、共同体としての意義はあまりないのです。

皆さん、ご存じでしょう。ウニベルシタス、

ヨーロッパの中世で、その高等教育機関として誕生した大学は、もともとウニベルシタスと呼ばれたわけです。ウニベルシタスということは、共同体、一つの組合、先生方と学生たちが一つの目標に向かって、一つの心をもってその共同体をなしている。そのような意味の共同体は、多分現代ではちよつと薄らいで来たかも知れません。そこで共同体、新しい共同体意識を作らなければ、多分大学は将来発展しないとします。そういうと、ある者はすぐ言うでしょう。今のマンモス大学、何万人の学生をかかえている大学では、このような共同体意識はあり得ないとい。

今でも共同体意識は造れる——家庭で話

に出るようなよい友人よい先生とつきあう

いや、あり得ると思えます。小さな学科の中で、あるいは学部の中で、まだまだいろいろの形で、そのような深い親しみ、暖かい雰囲気を作ることはできると思えます。私は皆さんにお願いしたいのですが、大学生活の中で一番大事なことは、やつぱりいい友だちを作る、そして一人でもいい、すばらしい先生とつき合つて、人生の友とする、ということなのです。

私はいろいろな機会に、学生の父兄に会うことがあります。その時にいつも聞かされることは、「どうですか、私の息子(あるいは娘)は、

どうなっているのですか」と。そういうとき、私は一つの質問をします。「うちに帰ってから先生の話をしていますか、あるいは友だちの話をしていますか、先生の文句でもいいのですよ」と。先生の話をし、友だちの話をすれば、その学生は、もう自分の大学として考えているということです。しかし全然友だちについて話すこともなければ、あるいは先生と個人的につき合ったこともないならば、もう大学生活は無意味だと思えます。それは、ただ先生から呼ばれないから、私は行かないんだ、ということでは、理由にならないと思えます。

先生の所へ行つて話し合う。いろいろの問題について、学問の問題でもいいし、大学の問題でもいいし、あるいは人生の問題について、信頼のできる先生は、一人ぐらいいはいるでしょう。自分の性質に合った先生の一人ぐらいいはいるはずで、それくらい努力がなければ、恐らく大学も学生も良くならないと思えます。

また、前にも申し上げたのですが、今の先生は、場合によっては自分の勉強さえ出来ればよい、自分の研究さえできればよい、学生たちと接触するのはめんどろだ、と思っている人もいます。しかし皆さんは授業料を払っているのです。あるいはまた国の税金でその先生は給与を貰っているのです。学生たちは要求していいのです。自分の権利です。しかし

要求しなければ、先生も喜んで接触しないという事です。栄光学園の校長先生の話になりませんが、結局一つの紙くずを拾わなければ、大学はだめになってしまう。反面に今度は学生が先生と接触しなければ、大学は良くならないのです。そして自分も良くならないと思います。

大学でのクラブ活動の重要性

私の栄光学園でのもう一つの経験は、夏のキャンプや、山岳部の顧問の手伝いをやったことです。私はイタリアのアルプスに近い所に四年ばかり学んでおり、そのとき山岳部に参加したわけです。あとで学問について話しますが、クラブ活動も人生のために一つの大事な経験でしょう。

私は学生たちに勧めたいのです。クラブ活動の中でお互い同士助け合って、すばらしい友情の絆を結べば、人生のために多くのプラスの面も出て来ると思います。クラブ活動は日本の教育の特徴ですが、ヨーロッパの大学ではクラブ活動はほとんどないのです。例えばスポーツ活動もあんまりありません。イギリスは別ですが、ヨーロッパ大陸では、そのスポーツも、他のクラブ活動もほとんどない。アメリカは、もちろんいくつものチームがありますが、日本のように何百ものクラブがあるという事はありません。

これは日本の良いところです。日本の将来が明るいと思う一つの理由はクラブの伝統的なつながりです。上下関係もそこにあるし、場合によって、ちよつと強すぎるかも知れませんが、友情です。一つの目的のために皆協力する。そのようなところにも、日本の素晴らしい伝統を見つけることができるでしょう。

上智大学神学部に入る

栄光学園で二年ばかり教えたあと、上智大学の神学部に入りました。その時代は石神井で、武蔵野はそのままだったんです。畑と森、ほんとうに素晴らしい風景でした。今そこへ帰るともう団地ばかり、家ばかりで、昔の面影は無くなったようです。そこで四年間いて、神学部を卒業し、司祭になりました。カトリックの司祭は、いろいろの教会で働くことになるのです。

ハーバード大学へ——国際政治学研究

そこでの体験・学生の気質

しかし私は上智大学を卒業すると、すぐアメリカのハーバード大学へ、国際政治を勉強しに行きました。自慢していいかどうか分からないのですが、そこでのキッシンジャーさん、ブレジンスキーさんの最初の教え子だったので、彼らはちょうど博士号をとったばかりで、教え始めたところでした。いまブレジンスキー

さんはカーター大統領の補佐官になっていますが、この二人のもとで私は中国と日本の政治のことを勉強したわけです。またライシャワーさんのもとで日本の明治初期の立憲主義について学び、博士論文を書きました。

これはそこでの体験です。一九五九年から六二年までの時代はちょうどケネディ大統領の選挙運動のときであり、そして大統領に選ばれた時期でした。その時期のハーバード大学の学生同士の雰囲気は、私に本当に素晴らしい刺激を与えました。何といいたほうが、自分たちはこの世界の将来の責任者になる、将来は自分たちにかかっているという、自信たっぷり、ちよつと鼻が高すぎるとみられるかも知れませんが、やはり私たちは多く与えられている以上、多く返さなければならぬ、そのような気持ちで本心に強かったのです。

そして多くの国の学生たちがいっしょに集まって、真剣に世界の問題についてよく論じていました。その時の体験と今の大学生の雰囲気を見ると、ちよつとがっかりする場合があります。

今の青年・学生には夢がない——

社会から多く与えられた者は

多く返すべきではないのか

君たちに露骨に申し上げますが、今の青年た

ちは、夢がない。二年前ある記事を見て、本当
にがっかりしました。ある県の調査だったので
すが、中学の一年生に「君にとって今一番大事
なことは何であるか」という質問に対して、一
番高い率の答は、「お金」ということでした。

例えば、今年も九月ころになると、上智で、
上智だけではなく全国の大学四年生は就職の
ことで心配して、いろんな会社を歩き廻るん
です。私は個人的に知っている四年生はまあ百人
ぐらいでしょう。その百人ぐらいの学生が学長
の特別推薦状とか、個人的な推薦状を頼みに来
ます。その意味で上智大学の学長室はだれでも
入れるので、自由に来られるわけです。私が会
議とか授業でなければ、誰でもいつでも入るこ
とができるわけです。入って来る学生たちに、
私は必ず聞くんです。「君はどうしてこの会社
を選んだのですか」と。すると、さきほどの中
学一年生の答と同じですね。「この会社は、倒
産しないと思うから」、あるいは「経済的な安
定が一番大きな目的です」と。それは決して悪
いとはいいません、その理由もいいのですが、
しかしそれだけですか。この会社に入って、社
会のために何をやりたいのですか。あるいは君
の人生で何をしたいのですか。ちよつとくらい
夢はないのですか、といたいたいです。

私が本当に心配しているのは、大学の先生が
たも、そして学生たちも、考えているのでしよ

うか。これからの日本の将来はどうなるのでし
よう。誰がそれについて真剣に考えるのですか。
あるいは世界はどうなっていくのですか。私は
その中で何をすべきなのか。就職に当たって、
このような大事な目的を忘れていたのでは、悲
観的にみざるを得ません。

前にも述べましたが、ハーバード大学の雰囲気
気は違っていたのです。多分エリート意識が強
すぎるのかも知れませんが、自分たちは社会か
ら多く与えられたんだから、社会へ多く返さな
ければならないという強い意識です。皆さんも
そのような気持ちを懐かないと、大学も良くな
らない、社会も良くならないのです。

上智大学で政治学を講ずる―― 政治の問題の四つの形容詞

私はハーバード大学から日本に帰ったあと
上智大学に送られました。もちろん教授会にか
けられ、無事、パスしたようです。そして昭和三
十九年に法学部の助教授になりました。日本の
伝統で新参者ですから、はじめは教授や学生の
サービスをやりました。そして本当に積極的に
皆といっしょに友だちになったり、一年生の学
生に政治学入門を教えました。一般教養の理工
学部、学生たちに政治学入門を教え、また法学
部の三年生と四年生に政治思想史を教えてい
たのです。また、そのころ、日本文化を世界に

紹介する一つの英語の雑誌の編集長としても
働いていたのです。

先生としての喜びは、学生たちと接触しなが
ら自分の信念を彼らに伝えるということでした。
イタリア人なので、ラテン系だから多分情熱も
あつて、政治問題について話しながら、自分の
人生の考え方も世界観も伝えたでしょう。絶対
的なことは人間を大切にすることです。そのこ
とを実現するために政治問題を考えると、理想
を追求し、真理を追究するということよりもも
つと大事になるのはウィズダム（思慮深さ）
です。政治というものは完全なものではない、
その不完全なものの中で、欠点のより少ないも
のを選ぶためのウィズダムが政治の目的で
す。しかし日本の政治学者は、普通、空想的な
永遠の真理を政治の中で見出そうとしている
ので、実際の政治と全然関連がないのです。

私はいつも学生たちに政治の問題について
ふれる時、四つの形容詞を出します。政治の問
題というのは、まず具体的な問題ですから、こ
の具体的な問題に関する永遠の原則は素晴ら
しいが、今この問題をどう解決するかというコ
ンクリートな、具体的なものでなければなら
ない。もう一つは、実現できるものでなければな
らない。実現できないものだったら、本当の政
治ではないのです。政治というものは“The art
of possible”です。可能な範囲の中の技術です。

それが分からなければ、役に立たない政治学になるのです。そしてもう一つはコンプレックス（複雑）です。政治というものは、スローガンというもので片付けることは出来ません。イデオロギーだけでは片付けることは出来ません。もう一つ、不完全なものです。完全性だけを政治の中に見つけようと思うならば、絶対主義に陥ってしまうのです。絶対的にいいということとは、絶対主義です。しかし私たちの社会は民主政治です。民主主義政治の場合には、結局完全な解決は見出せられない。いつも不完全なものですが、しかし不完全なものを、いつも直そうとしているのです。そのような背景で政治を教えます。学生たちもそうであるなら、政治に関心を寄せるようになる。それは教師としての体験でした。

上智大学の理事長に推される——

医学部は設けず——大学紛争を処理する

ところで、日本の大学の学校法人の理事長は、だいたい七十歳以上のお年寄りの、経験ある方がなりますが、今度は不思議なことに昭和四十三年に理事会は私を理事長に任命したのです。三十九歳の理事長だったんです。ちよつと大変なこと、どうして私を理事長にしたのか分からなかったのですが、しかし理事長になった以上、結局、大学の財政問題、そして理事長にな

つたすぐ後に大学紛争がはじまりました。

まず第一に、財政の問題についてちよつとふれたいのですが、上智大学はちよつと十五年ほど前に、神奈川県秦野という町に九万坪ぐらいの土地を買って、そこに将来医学部を設立する計画がありました。理事長になってすぐ後でその問題にぶつかって、理事会の中で一つの決定を下すことになりました。結局医学部は設けないことにしました。なぜ設けないという決定になったかという、その時代は資金的に不正をやらなければ、私学で医学部は設けられないというような状態だったのです。教育機関で不正をやらなければ教育を与えることが出来ないなら、私は始めから教育を与えないほうがいいと思いました。不正というと、結局裏口入学とか、あるいは莫大な寄付金を取るとか、いろいろのことがあるわけです。私は他の大学のことはふれませんが、他の大学は他の財源があるでしょう。しかし上智は財源がないので莫大な寄付金とか、あるいは裏口入学金とかを取らなければ、医学部は設けられない。それだったら設けないほうがいいと。

上智大学が誇れることは、これまで入学と金入学とコネの問題はなかったんです。そしてもう一つ、あるときは定員以上採ったこともありましたが、しかし水増しもそれほど無かったという事です。何故そのような決定にしたかとい

うと、教育とは正直でなければならぬ、不正をやってはいけません。そして大学は高等教育機関、最高教育機関といわれながら、その最低のものさえ実現していないということだったから、決して教育機関になれないのです。

そういう意味で私たち私立大学は国庫助成をいただくようになったという事は、本当に有難いことです。しかしまだまだ足りないのです。どこの大学も結局財政問題、財政の困難があります。悪いことをすれば、財政は多分良くなるかも知れない。しかし教育は決して良くならないのです。教育者である以上、先ず自分の姿勢を正すということ。教育を与えようと思うならば、先ず生きて示す、ということ。つぎに、大学の紛争のことですが、私にとつて一番苦しくまた有難い体験はこれでした。昭和四十三年の十二月、もう冬のさなか、五時間ばかり全学集会に参加して、集会が終わるところで捕まらないように逃げて、まだ若かったから大丈夫だったんですが、ちよつと回り道してホテル・オータニまで行ってコーヒーを飲んで教授館に帰りました。すると受付にちっちゃな小包があつて、爆弾の時代ではなかったのだから安心して中味を開けると、その中にビタミン剤とチョコレートと、「先生、ご苦労様でした。お体をお大切にして下さい」と書いた一つの小さいメモが入っておりました。ただそれだけで

す。サインもない、一人の学生からのものでした。私はその時に、日本へ来てよかったと思っただけです。一人の学生でも私のやろうとしていくことを理解するならば、それは素晴らしい人生の喜びだ、と思いました。

そのころは皆さんは若かったから、覚えていないでしょう。もう心配で大学はどうなるか、日本全国で百ぐらいの大学は紛争で占拠されて、どうなるかと心配されました。その時の私は「悟り」といいますか、あるいは一つのは心構えとして自分のベストを尽くせばそれでよい、と信じていました。それ以上心配しない。私はこのことをある新聞記者に言ったんです。解決できない問題はもう解決されているのです、もう心配しません。私は学生たちがワーワー騒いでも、インターナショナルを歌っても、教授館はすぐそばにあったのですが、寝る時間になるとそのまま寝てしまっただけです。解決できない問題は解決されているのです。

その時に、これも自慢にはならなかったかも知れませんが、機動隊を最初に呼んだのは上智大学でした。しかしこれは不思議なことですが、機動隊を呼ぶことに一人の先生も職員も反対しなかった。何故か。もう二十回ぐらい全学の教授会、職員会議を集めて、やるべき改革は全部やった。全共闘をまじえて何回も集会をやった。それでもなお残る問題に彼らは満足しない。

彼らの目的は大学を破壊するということです。教職員は、ここまでできたら、もう大学の責任者にまかせるということでした。大学の取る処置は、皆の処置である。機動隊を呼んだ時に、教授と職員たちはみな一致してそれをサポートしたんです。しかしいろいろの改革もいま考えると、多分あんまり良くない改革もあったようです。

そのとき私は感じたのですが、大学の自治という名目で外の社会で出来ないことを大学の中でやるのは、それは野蛮人のやり方です。大学の自治の名目で暴力を許す。これは私の心に許すことができないことでした。暴力はいい目的のためであっても、民主主義国家では永久に許せることはありません。この信念がなければ、いつまでも解決になりません。

しかし反面には、解決すべきことは解決しなくてはならないのです。改革もしない、暴力を許す。これでは決して大学の将来は明るくないのです。今でもある場合には同じような事で、外の社会で許されていない事が大学の中で許されていることがあります。何かやれば、それよりも大きな紛争になるのだから、それとなく許してしまうということもあるようです。

私たちは本当に文化の発展のために、大学の将来を考えなければなりません。文化の発展というと、まず第一に、意見の差があっても、理

性をもつてぶつかる。そこから新しい道を見つけていくことです。大学が野蛮人のやり方で、力で解決しようということであつたら、最高の教育と研究の機関ではなくなってしまうので、(拍手)

※当DVD収録のご講演録には、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。